
恋 煩 の

近藤 貴弥



出 藍 文 庫

稗田阿求が書齋の畳で目覚めた時、陽は暮れていた。部屋の少し高い所にある窓からは夕陽が射し込み、部屋は茜色に染まっていた。障子は微かに開いており、去ろうとする女中の背中が見える。胸の辺りが重く、目を遣ると掛けた覚えのない襦袍がある。

食卓で女中と共に昼餉を摂った後に、書齋で編纂に取り組んでいたことは覚えている。途中で眠気に襲われ、八つ時には少し早かったが紅茶を用意させた。眠気を退けることはできず、船を漕ぐことがあった。

どうやら、そのまま眠ってしまったようだ。ゆっくりと身体を起こし、襦袍を肩に掛けて、文机へ寄る。眠りへと落ちる前のように、机には編纂に用いた資料やメモ書きが散らばっており、茶碗には少し飲んだ紅茶が残っている。口を付けてみるともう随分と冷たく、途端に胸が締め付けられるような痛みを覚える。それほど眠ってしまったのだろうか。

机の端に置いていた鈴を鳴らす。高い音が響き、女中が書齋に顔を出した。阿求は欠伸を零し、眠気の強いぼんやりとした眼差しを女中に向ける。紡ぐ言葉は弱々しかった。

「……どのくらい、寝ていましたか？」

「おはようございます。一刻程です」

女中のはつきりとした声を聞いても、阿求の頭は全然冴えない。女中の言葉を反芻して、何かを確かめるように、そうですかと答えるだけだった。

阿求が昼間に眠るようになったのはここ最近のこと。人里や妖怪の山の木々が真っ赤に染まる頃から始まった。原因は分かっており、夜に眠れなくなったせいだ。眠れたとしても、微かな物音や気配ですぐに意識が覚醒したり、丑三つ時に目覚めたりしてしまい、夜通し眠れない。

眠れなくなった夜のことは今でも鮮明に思い出せる。夕餉の後に編纂を続けていたが、いよいよ夜も深くなり、その手を止めて床に就いた。どうも先の編纂のことが気にかかる。一度気にかかると頭は段々と冴え、眠気を押し退けようとする。眠らないと翌朝に響くため、眠ろうと試みる。寝て起きてから気になったところを考え直そう。少し確認するのだけならば今の間にしてもいいのではないだろうか。思考は巡り、次第に熱を帯びて、

全く予期していなかった考えに辿り着いた。

稗田阿求としての一生の折り返し地点に立つた今、このままの生活を送っているのだろうか、と。

眠りに落ち、翌朝に目覚めないことは有り得るのではないだろうか。眠るように安らかな一生を終えられるのなら良いことかもしれないが、その時が今夜や明日の夜だと思ふと途端に恐ろしくなる。風呂で温めた身体が急速に冷え、気味の悪い汗が皮膚を伝う。阿求の生はもう折り返し地点に来ており、一日、また一日と過ぎる度に、この世から去る時が近付いてくる。現実のこととして、阿求の前に姿を見せようとしている。

その夜から、阿求の眠りに対する考えは大きく変わった。眠りに身を委ねないようにした。が、阿求はただの人間であり少女である以上、眠らないで生活を続けることはできない。朝方や昼間に眠気は限界を迎える。日が傾くまで眠るということはなく、一刻程度で目覚める。

近頃は微睡んでいる時間が長くなり、今が朝なのか昼なのか夜なのかという境界が曖

味になっている。自分が今起きているのか眠っているのかすら曖昧に思う時がある。

女中が身の回りを世話してくれるお陰で、意識が戻り、その端々で時の流れを思い出す。
「……もう少しお休みになられても良いかと」

女中が阿求の顔を見上げて遠慮がちに言う。彼女が心配していることが分かるが、再び横になってしまえば、次に目覚めるのはいつになるか分からない。

眠気を誤魔化すように紅茶を飲む。琥珀色の水色に映る阿求の目元には、連日と変わらない濃い隈が刻まれている。

「大丈夫ですよ」

「……編纂のことで、何かあったのですか？」

「何もありません」

「秋口から、ずっと編纂ばかりではありませんか……」

女中が心配をするのは無理もない。

眠らない時間が増えると、阿求はその時間を編纂に充てるようになった。屋敷の明か

りを落とすように命じても、書齋の明かりが灯ったままであることは今に始まったことではない。

真夜中になっても編纂を続けるのが効率的ではないことはすぐに分かった。頭に浮かぶ言葉を掬い上げ、文章としてまとめるのが難しくなっている。眠気に言葉を奪われているかのように、文章の節々に穴が空く。眠った方が良いのは阿求自身でも分かっていた。床に就き、ただ何もせず夜が明けるのを待つのは堪えられなかった。時の流れが遅く感じ、どうにかなってしまいたいそうだった。眠りに落ちることもあったのだが、その時の朝などは不気味な恐怖に胸を締め付けられる。明日は今日のように起きられず、最期を迎えてしまうのではないだろうか。

阿求は自身に忍び寄る死の影のことを、誰にも打ち明けられなかった。阿求の周りにいる人間は阿求よりも長く生きられ、人間以外の存在は、そういう理から外れている。阿求が心情を打ち明けたところで、彼女達には分からない。

「気にすることはありませんよ」

「ですが……」

女中はまだ何か言いたげであったが、掃除や食事の準備を命じると渋々といった様子で応じる。

その日の夜、阿求は夕暮れの時と変わらないように書斎に居た。編纂は夕暮れの頃から何も進んでおらず、ただ文机の上に広げてあるだけだった。

女中は先に休んでおり、屋敷はしんとしている。過敏になつた阿求の耳は、書斎まで届くはずのない庭の紅葉が風で揺さぶられる音や虫の鳴き声や屋敷の外を流れる川のせせらぎを捉えていた。

机の端には、夕餉の前に永遠亭から届けられた薬袋が置いてある。夜は日を追う毎に長くなり、阿求はいよいよ永遠亭に薬の処方をも希つた。薬袋を受け取つた女中は訝しむように阿求を見上げたが、何も言わなかった。何かの薬であることは察していると思うが、どういう効果をもたらす薬かまでは分からないことだろう。あるいは、睡眠薬か何かの類と思つてのことだろう。

袋の中には薬包に包まれた白い錠剤と手紙が入っている。手紙には編纂を労う言葉の後で、こういう言葉が続いていた。

『不安や焦燥を和らげる効果があるので、寝る前に一錠。もしそれでも眠れないようでしたら、違う効果の薬を渡します。お大事に』

阿求は女中が眠った後でも、処方された白い錠剤を服薬できなかった。手を伸ばそうとするのだが、薬袋まで伸びない。

眠らないようにしている阿求にとつて、寝る前をいつにすればいいのか分からなかった。この薬を飲んでしまえば、もう眠ってしまったわなければならぬように思える。

そういう意図で処方された薬ではないことは頭では分かるのだが、服薬するのが恐ろしい。服薬することなく朝を迎え、朝餉の後に文机で伏すように眠った。

永遠亭から受け取った薬を一度も服することなくある朝のことである。騒がしかった虫の鳴き声が聞こえなくなり、大通りに面した店の者は皆、火鉢を囲っているのか呼び声一つ聞こえてこない。単調な小川の流れる音だけが絶えず微かに聞こえ、阿求の神経を

刺激する。

書斎の窓の向こうは重たく暗い雲が広がっている。夜通し起きていた阿求は微睡みを覚え、次に目覚めた時には雲の切れ間から陽の光は降り注いでいた。女中を呼び、遅い昼餉を用意させた。食卓に着いた時、こう言われた。

「食後に、書斎の掃除をしますので手伝ってください」

「……掃除、ですか？ 私でもできますが？」

女中は聞く耳を持たず、微かに眉を顰める。

「最近、寢床に戻られたのはいつですか？」

「秋口が最後ですね」

「このままではお身体に障ります」

「そうかもしれませんが……」

体調を崩してしまえば、その寢床が阿求にとって終の棲家となる。きっと体調を崩すのは風邪や発熱という類のものから始まり、大きな病に繋がるのだ。病を患い阿求の一

生が終わるのならば、それで良いような気がする。今のように誰にも思いを打ち明けられず、一人で抱え込むよりかは気楽かもしれない。けれども、もし実際に自らの生が今よりも明確に死の淵へ立つことがあれば、その時の阿求はきつと、かつての自分を悔やむことだろう。

「そこで、寝具を一式、書齋に置きます」

女中の提案に、阿求は目を見張る。

「……どこに、です？」

「書齋にです」

「そんな余裕はないと思うのですが」

「作ります」

「編纂に使う資料があります」

「寝床に移しましょう」

「どの資料を移す気ですか？」

阿求に問われ、女中すぐに答える。

「ですので、手伝ってくださいというわけです」

「それは、つまり、資料の選別をしろということですか？」

「そうです」

「……困りましたねえ」

書齋には阿求にしか分からない資料が至る所に置いてある。全てを記憶しているのだから資料は必要ないと思っていた。眠らない日々を過ごすようになると、思い出すことに少し時間がかかるようになってきた。言葉や出来事から関連付けて編纂に必要な資料を引つ張り上げてくるのだが、この引つ張り上げてくる作業に時間を要する。資料以外のことも思い出してしまふ。覚えることは以前と変わらないのだが、思い出す精度が落ちている。

いつかの資料で、阿求を始めとした人間達は眠っている間に記憶を整理する、と読んだことがある。眠っている時間が極端に少なくなったため、記憶の整理ができなくなっ

ているのだろう。

眠るということは、阿求にとつては他の人間達よりも必要なのかもしれない。永遠亭から授かった薬を真昼間に服してでも、眠る時間を設けた方が良いのかもしれない。眠りに身を委ねた方が良いことは分かっている。

もし目覚められなかった時のことを思うと末恐ろしい。眠る阿求の側に誰かがいて、起こしてくれるのならば、心の隅々にまで広がっている不安や恐怖はあるべき所に落ち着いてくれるのだろうか。誰かいないかと考えてみたが、浮かぶ顔はいずれも人間ではなかった。

誰を頼るべきか悩んでいると、女中に昼餉を急かさされ、阿求は考えるのを中断して、食事を再開した。

食後の女中の動きは機敏なものだった。洗い物やら何やらを済ませると、食後に飲むはずだった二人分の紅茶を盆に乗せて、阿求の背を押し、屋敷の最も奥にある書齋まで連れてきた。小川を流れる音はいつしか聞こえなくなり、阿求は密かに安堵の息を吐いた。

息を吐いたのも束の間、女中は阿求に盆を預けると、袖をまとめ上げ、障子を全て開け放つ。

阿求は廊下の端に腰を下ろし、壁に寄り掛かり、食後の紅茶を片手に彼女を見守る。欠伸が一つ零れた。湯気の向こうで、女中はよく動いていた。

文机や書棚に置いてある資料をまとめると、阿求の前まで持ってきて、必要なのかどうか尋ねる。阿求の返答を聞くと、女中はすぐに資料をまとめて寢床へ駆ける。屋敷に不釣り合いな大きな足音が響き渡る。阿求は頭痛を覚え、微かに表情を歪めた。

「……随分と賑やかな時に来ちゃったかしら？」

藤原妹紅の来客に二人が気が付かなかったのは、無理もないことだった。妹紅の視線は駆けていった女中の背中を追いかける。

阿求は立ち上がり、静かな足取りで書斎に入る。資料が幾つか移されただけで、広々と感じられる。文机の側に置いてある座布団を盆の隣に置く。

「構いませんよ別に。どうぞ」

「急ぎではないから明日にまた来ましようか？」

「いいんですよ。私が始めたことではありませんから。こんな所で申しわけありませんが、飲まれますか？」

外からやって来た妹紅は久し振りに嗅ぐ土の香りがして、裾や袖は微かに濡れている。よく見ると、髪も濡れてる。阿求は書斎に置いてある手拭いを手渡す。

「雨ですか？」

妹紅は濡れた髪などを拭いて、座布団に腰を下ろす。

「雪よ」

「初雪ですね。積もりそうですか？」

「積もることはないと思いたいわね……。雪掻き大変じゃない」

「暖かいのも淹れましようか」

と言つて、阿求は盆に置いていた空の茶碗に紅茶を注ごうとする。

「……いいのかしら？」

「あの子には後で洋菓子でも」

「買に行かせるの？」

「ええ」

「雪の中を？」

「そうです」

「今日は随分と不機嫌じゃない」

気遣うように微笑する妹紅に、阿求は壁にもたれて痩せた笑みを返した。

「昼餉の時からですよ」

発した言葉は阿求自身が思っているよりも刺々しいものを含んでいた。はつと驚き、隣に視線を滑らせば、妹紅は何も聞こえなかったかのように涼しい顔で紅茶を飲んでいる。その目の端々にはまだ新鮮な動揺が見て取れた。妹紅は沈黙を守っている。堪らず阿求から言うしかなかった。まるで、女中以外の誰かに聞いてほしかったように。

「書齋を掃除すると言って、もう大変です。私としては別にしなくてもいいんですけど、

あの子がとてもやりたそうなので。掃除されて困るようなことはありませんけれど、急なことで困ります」

また大きな足音が響き、近付いてくる。阿求と妹紅の視線は廊下の奥を揃って見た。角から見えたのは今ではすっかり使わなくなった寝具一式。一番上に置かれた枕の向こう側から女中の大きな声が聞こえる。

「阿求様、どこに置きますか？」

女中には声を殺して笑う妹紅の姿など当然見えなかった。こうなることは分かっていたことだけれど、客人に見られると恥ずかしい。阿求は頬を紅潮させて答える。

「どこでも構いませんよ」

「ちゃんと使ってくださいよ？」

「分かっていますよ……」

寝具の向こうから女中の呆れた顔を覗かせ、周りを確認する。女中が妹紅に気付いたのと、妹紅が吹き出し、笑い声を上げたのはほとんど同じだった。阿求は自分の頬が一

層熱くなるのを感じた。

「妹紅さん、いつお越しに？」

「ついさつきよ。その布団は？」

女中は寝具を書斎の端に下ろすと、阿求の最近の様子を妹紅に伝えるのだった。

「妹紅さん、聞いてくださいよ。阿求様、最近全然寝てないんですよ。編纂ばかりされていて」

「そんなに忙しいの？」

妹紅の目が女中から阿求に移る。欠伸を漏らす阿求は、目の端に浮かんだ涙を指で拭くと小さな声で曖昧に答えた。

「まあ、……忙しいかどうか尋ねられると忙しいような気がします」

「みたいです」

「大変なのね」

「休んだ方が良いと思いませんか？」

「そうね。頑張るのは良いかもしれないけれど、頑張り過ぎるのは身体に毒だと思うわよ？」

「妹紅さんもこう言ってますよ」

妹紅と女中の意見が正しいことは阿求でも分かる。休みを挟んだ方が良いことは体感している。純粹に編纂のことだけを考えているのならば、阿求の頭を占めているのは編纂ではなく、もつと切実な自らの生と死のことであつた。

妹紅は老いることも死ぬこともない少女であり、永遠に少女である。阿求の抱えている恐怖や不安とは最も遠いところにいる。彼女に話したところで、この重苦しい感情が取り除かれるとは思えない。

生や死から最も遠いところにいる妹紅だったが、阿求は何か近いものを、妹紅に懐いていた。

妹紅からしてみれば、阿求達と会う必要もない。幻想郷縁起という書物を作るために妹紅の元に足を運ぶが、適当にあしらえばいい。永遠を生きていて性質は変わらないの

だから、書かれることは変わらない。

妹紅は永遠に生きているからこそ、多くの御阿礼の子との出会いと別れを繰り返している。書物に記録として残っていないような出来事を、妹紅は見聞きしている。御阿礼の子がその生を全うし、次代として転生するまで百年と少しの時間を必要とする。それほど時が経てば、社会の仕組みが変わることもあれば、街並みが変わることもあり、御阿礼の子を覚えていた人間など存在しなくなる。

先代から引き継いだ朧げな記憶は何も使い物にならず、多くのことを覚え直す必要がある。そういう記憶の中で、妹紅という少女だけは人間の形を保ち、声も不思議と覚えている。妹紅が永遠を生きられるため、御阿礼の子は転生を繰り返すために、出会いと別れを何度も体験しているからこそ、生まれた縁なのだろうか。

阿求の胸にある恐怖は、かつて妹紅が何度も、そしてこれからも数えきれないほど味わう別離の苦しみに近いような気がした。

妹紅になれば、この胸の内を打ち明けてもいいのではないだろうか。永遠に近い時

間を生きる妖怪とは違い、人間だったことがある妹紅ならば、阿求の気持ちに寄り添ってくれるのではないだろうか。

女中はいつしか書斎の端に腰を降ろして、妹紅と話をしている。食卓に置いてあった蜜柑を持ってきて、運ばれた寝具はいつの間にか敷かれており、資料の位置も変わっている。阿求は冷たい眼差しで女中と妹紅をまとめて見た。

「まだ寝る時間ではないと思いますが？」

妹紅は阿求の目を見て、柔らかかに笑う。

「そんな顔で言っても説得力はないわよ」

「まだやることが残っているではありませんか？」

女中に言うと、彼女の顔は強張った。妹紅が庇うように答える。

「休憩も大事よね？」

「構いませんが、そこで休憩されると私が困ります」

呆れたように言うと、女中はすぐに掃除を再開する。資料の必要性を阿求に尋ね、ま

とめると寝床へ運ぶ。

女中の姿が見えなくなり、足音も聞こえなくなると、阿求は声を潜めて切り出した。

「あの子に、一つ言えなかつたことがあります」

「向こうで寝られないのは何か別の理由がある、つて？」

平然と尋ね返す妹紅に少し驚き、妹紅が答えるのを急かすように、阿求はじつと色を変えない瞳を見た。

「編纂は一生をかけて行うもので、今それほど急ぐようなことはない。急ぎ続けて不調になってしまえば、遅れが生じる。悪循環は身を滅ぼす。貴女達は皆、そう言ってきた」
妹紅は空になった紅茶碗を盆に返して続ける。その口振りは、御阿礼の子の生き様を側で見守り続けたのか、不思議と温かいものだった。

「貴女達が転生するのに百年と少しの時間が必要になる。その間の編纂は誰も行わない。空白の期間が生じてしまう。だから貴女達は最初に膨大な記録と僅かに託された記憶を辿って、空白の期間を埋める必要がある。その作業を終えてから、現世の記録を始めな

ければならない。でも、空白の期間を埋めている間も現世では異変だとか様々なことが起きてしまう。貴女達の編纂が今に追いつくことはなく、一人で行える作業量ではない。そのことは誰でもない貴女がよく理解していることだと思うわ」

妹紅の語る長い昔話の間に、阿求は平静さを取り戻して訊く。

「それがどうして寝られないという理由に繋がると？」

「編纂というのが大変なのは分かるけれど、建前に便利なよ。この世界で貴女達しかしていないことだから、詳しいことは分からない。きっと、記録にもあまり残っていないでしょう。何か都合の悪いことが起きたら、編纂を理由にすれば、深く立ち入ることはしないでしょね」

妹紅は阿求の方を向いて、真面目な調子で問う。深い紅の瞳が、阿求の青白い顔を覗き込む。

「それで一体どうしたのかしら？」

阿求は短く息を吐いた後、一つ前置きをした。心なしか声が震えているような気がする。

「これから私が何を言っても、笑わないでくれますか？」

妹紅は無言で頷き、阿求は正直に答える。

「眠るのが怖いんです」

阿求の答えが意外だったのか、妹紅の真面目な表情が少し崩れた。睡眠が生活と切り離せない関係のため事の重大さを察したようで、妹紅はすぐに続けて訊いた。

「どういうことかしら？」

「もう二度と目覚められないと思うと怖いのです」

妹紅の瞳に温かな情が宿った。何人もの御阿礼の子と別れてきた妹紅は、もしかすれば阿求よりも、その瞬間については詳しいかもしれない。気遣うように呟いた妹紅の言葉は、阿求自身を励ますよりも、妹紅自身に言い聞かせ確かめているようだった。

「まだ、でしょう……」

「分かつてはいるつもりです……。ですが、毎夜思うんです」

「このまま目覚めなかったらどうしようか、と？」

阿求が頷くと、妹紅は口を閉ざした。何か考えを巡らせているのか胡座をかいて頬杖をついている。女中は寢床で整理を続けているのかまだ帰ってくる気配はない。

雪はいよいよ本格的に降り始めたようだった。瓦屋根に降り、吸われ、溶ける。そんな音すら聞こえてくる。今夜も降り続けるのだろうか。火鉢の準備も必要を、女中に頼んでもいいだろう。去年は女中と阿求だけでは火鉢を動かすことができず、里の者や妹紅に手伝ってもらった覚えがある。話が終われば、妹紅に相談してみてもいいのかもしれない。

妹紅が口を開けたのは、阿求がそんなことを考えている時だった。

「少し、横になってみない？ 起こしてあげるから」

妹紅の提案に、阿求の思考は止まった。言葉を失ったように目を見開き、妹紅を見る。妹紅は書齋に運ばれた寝具を見ている。

阿求が答えないでいると、妹紅は阿求の方を向いた。その目は先の提案が冗談ではないと物語っていた。沈黙が長引くと、妹紅は何かおかしなことを言っているのかと言

たげに小首を傾げる。阿求の胸の内を見るように目を細めてみせた。

阿求は妹紅の提案の意味が分からず、苛立ちを露わにした。眉間に力が入っているのが分かった。妹紅は阿求の怒りを真正面から受けても涼しい顔をしている。

「私の話を聞いていましたか？」

「聞いてたわよ。夜に眠れなくて困ってるんでしょう。試しに今少しだけ寝てみたらいいじゃない？ 私が起こしてあげるから。眠れないのか、夜に眠れないのか分かるだけでも気持ちに余裕ができると思うわよ」

そういう問題ではないと再び説明したところで、妹紅の提案が変わると思えない。寧ろ一層、眠るように促されることだろう。横になって眠ってしまったら、今晚眠るのが難しくなってしまう。妹紅はそういうことを考えているのだろうか。阿求は露骨に溜息をつき、妹紅を睨む。

「それで今晩寝られなかったら、元も子もないと思いますか？」

「少しの間でいいのよ。そうしたら起こしてあげるから」

「もし今、眠れなかつたらどうしますか？」

「そうね、また夜に来るわ」

「夜にも起きていますか？」

「それでも構わないわよ。とりあえず今は試しに、ね？」

妹紅はどうしても阿求に眠ってほしいようだった。事はこれ以上、阿求に有利な状況になる気配はない。

「絶対起こしてくださいね？」

阿求は念を押すように言い、白い足袋と袴を脱いだ。皺にならないように袴を畳み、足袋と共に枕元に運ぶ。冷たい板張りの廊下を荒い歩調で進み、畳を踏む。寝間着に着替えようと考えてみたが、まだ夜は更けておらず、妹紅にああいうことを言った手前、女中に用意させる気にもなれない。

布団の上に腰を下ろす。周りには見慣れた文机や筆が置いてある。視線を廊下に向ければ、こちらを向き微笑を浮かべる妹紅の姿がある。阿求は綿の詰まった分厚い布団の

中に身体を入れ、仰向けのままで考える。

阿求が眠りから覚めた時、きつと最初に見るのは妹紅なのではないだろうか。女中が起こしに来ると思いたいが、妹紅が起こすことが譲らないように思う。主人と客人の約束となれば、女中は強く出られないだろう。

女中に寝姿や寝顔を晒すことに抵抗はない。阿求の身の回りをすることが彼女の務めであり、阿求としても慣れていく。しかし妹紅に寝姿や寝顔を見せるなど、考えたこともなければ想像したこともない。阿求は猛烈な恥ずかしさを覚え、顔が火のように熱くなった。身体を起こし、妹紅に気付かれないように自然な仕草で袂で顔を隠して障子に手を掛ける。

妹紅は阿求の動作に意外そうな声を上げる。

「閉めるの？」

阿求は小さな声で答える。

「ええ、そうしないと寝られないので」

阿求が障子を閉めようとした時、妹紅は立ち上がり、障子を閉ざすのを拒んだ。温かい妹紅の手が、阿求の細い指を一瞬掴んだ。咄嗟に手を止めた阿求を他所に、妹紅は布団を踏まないように書斎を軽い調子で歩み、部屋の奥へと移動された文机の奥に胡座をかいた。閉められなかつた障子は、阿求がそつと閉めた。

妹紅は机に頬杖をつき、布団に戻り横になろうとした阿求を見る。阿求は横になるとなく上半身を起こしたまま、目を丸くしていた。女中のように廊下で待っているとばかり思っていたのだ。妹紅は優しく答えてくれた。

「起こすつて約束したから。閉められたら、寝てるかどうか分からないじゃない？」

「開けても構いませんと？」

「開けて起きられたらどうするのよ」

「その時はその時ではありませんか？」

「そうなつてほしくないのよ。……話はこれくらいにして横になつてみたらどうかしら？」

阿求はせめてもの抵抗として妹紅に背中を向けて眠ることにした。重たかつた瞼は突然

のことに驚き、軽くなった。目を閉じると瞼の裏にはまだ暗くなっていない書斎の明るさが映し出された。書斎は筆が走る音も資料を確認する音も立つことなく、本来の役目とは全然違う部屋になっていた。落ち着くことなく大きな鼓動を続ける阿求の胸の音が、妹紅に聞こえてしまうのではないだろうか。身体の端々に緊張感が宿る。阿求の呼吸だけが不自然に大きく書斎に響いているような錯覚に陥る。

音で周りのことを知ろうとした阿求の耳は鋭敏になり、妹紅がいつまでも動かないことが知れた。最後に見た時と同じように、頬杖をつき阿求が眠るのを見守っているのだろう。阿求が起きるまでそうしている気なのだろう。阿求の身を包んでいた緊張感は少しずつ解かれていった。

誰かに見守られていると阿求の胸に広がっていた不安や恐怖は和らぎ、眠りへと導かれる。瞼は重さを取り戻し、次第に暗くなり、不自然だと感じていた自身の呼吸は落ち着く。

周囲との関係が段々と曖昧になる。遠くから聞こえる大きな足音は女中だろうか。開

け放たれた障子の向こうに、しつと咎めるように声を立てたのは妹紅。女中の書齋に入るのを躊躇っている様子だった。額の所に女中の視線を感じる。

「……阿求様？」

阿求は自身の意識が覚醒し、しつかりと反応したように思ったが、女中には何も聞こえていないようだった。代わりに妹紅が落ち着いて答えてくれた。

「寝ているだけよ」

「また急ですね」

「私が言ったのよ。少し寝たらつて。時間が経てば起こしてあげるからつて」
妹紅の言葉に女中の驚いたように声を上げた。

「それで、寝られたのですか？」

「あの顔だとすぐにでも眠ると思うわ」

阿求のことを気にせず話す妹紅と女中に何かを言ったと思うのだが、阿求の口の中で広がるだけで声にまではならない。

女中は慎ましく書斎を歩き、妹紅の前に座った。二人は阿求の声に反応することなく、阿求に聞こえない声量で話している。少し経った後、女中は阿求を気遣うように書斎を出て行った。

*

*

阿求が目覚めた時、普段ならば寝起きと共に襲ってくる不安感はなかった。分厚い布団に長襦袢を重ねたためか寝汗をかき不快感の方が強かった。

身体を起こし、はつきりとしなない視線を机の方へ向ける。昼の時とは違い赤い襦袢を羽織って横を向く妹紅の姿があった。机には味噌汁の茶碗や箸が置かれ、湯呑みもある。妹紅は阿求が目覚めたことに気付いていないのか、横を向いたままだ。妹紅と同じ方向を向くと、蔵にしまつてあるはずの火鉢が置かれている。妹紅は火鉢に手をかざして、暖を取っていた。

阿求が眠っている間に蔵から運び出したのだろう。書斎の高い所に位置してある横長の窓と障子は少し開けられ、昼間の時とは違う重く冷たい風が書斎に降ってきた。窓の向こうは暗く、端からは小振りな月が顔を出そうとしている。

阿求は身震いを起こし、火鉢の方へ身を寄せようとする。布団が身体を滑り落ち、衣擦れが起きた。妹紅の肩は上下に大きく揺れ、阿求と目が合った。妹紅の視線はすぐに阿求から外れ、宙を彷徨い、口籠った後に阿求と目を合わせた。

「……何度か声はかけたのよ」

阿求は火鉢に手をかざし、妹紅の言葉にどういふ返事をすればいいのか悩んでいた。別の悩みもあり、阿求はひとまず机に置いてある鈴を鳴らし、女中を呼ぶ。

「夕餉を」

と命じる。女中は阿求が目覚めたことに驚いている様子はない。

「お運びいたしましたでしょうか？」

「向こうでいただきます」

「でき次第、また来ます。妹紅さんは？」

「私はもういいわ」

女中は妹紅の返事を聞くと、書斎を後にした。

阿求と妹紅の間を夜風が吹き抜けていくが、辿々しい空気は一向に入れ替わる気配を見せない。

妹紅の口振りから、彼女が阿求を起こそうとしたのは確かだろう。黄昏の頃には声をかけたことだろう。それでも阿求は起きず、日は一刻また一刻と傾き、いよいよ月が見える時分になった。眠る前に約束を交わしたため帰るわけにはいかず、夕餉を振舞われた。寝るまでの妹紅との会話を思い返すと、起こされなかった阿求が立腹するのは当然なことだった。妹紅は今、雷が落ちるのを待っている状態である。

阿求の胸に怒りや激しい感情はなく、阿求自身にも分からない穏やかなものが広がっている。妹紅に声をかけられて目覚めなかったのも、深い眠りに落ちていた阿求自身に責任があるような気がしてならない。妹紅から、厳しい調子で詰め寄られた方が今の阿

求には心地良かった。少なくとも互いが互いのために非を覚え、沈黙を守っている現状よりかは。

沈黙を守っていた阿求だったが、この屋敷の主人として妹紅に確認しなければならな
いことがあり、一つずつ尋ねていくことにした。声音は至って平静で、妹紅の失態を責
めるような調子は全然なかった。

「その襦袢は？」

妹紅の声にいつものような覇気はなく、弱々しい。

「あの子が、冷えるといけませんので、つて貸してくれたのよ」

「火鉢は？ 蔵にしまつてあつたと思うのですが？」

「雪が降つてたでしょう？ それで、あの子が出しましょつて」

「昨年続き、今年も手伝つていただきありがとうございます。それで、その食事は？」

「火鉢のお礼らしいわ。私は別に呼ばれる気はなかったのだけれど、あの子がどうし
ても、と」

阿求は段々と恥ずかしさを覚え、食事のことを聞いている内に堪えられなくなった。「うちの者が凶々しく申しわけありません」

阿求が非を詫びると妹紅も続けて自らの非を詫びた。

「私も悪かったからお互い様よ。あの子はあの子なりに気を遣っただけよ」

「そう言っていたけると助かります」

屋敷の主人としての役目を終えた阿求は、全然違う恥ずかしさを味わいながらも本題に入ることにした。

「……私は起きませんでしたか？」

「ええ、全然。声をかけたり、肩を軽く叩いたり揺すったりしてみただけれど、よく寝てたわ」

「妹紅さんは私が寝ている間に何かしましたか？」

「言っただでしょうか？ 声をかけたり、肩を軽く叩いたり揺すったりしたぐらい。他には何もしてないわ」

阿求は妹紅のどの行為も体験した覚えがない。普段ならば、すぐに目覚めてしまうのに。阿求はこの時になってようやく、自身の胸に広がっている穏やかな気持ちを当惑を交えて伝えた。

「寝る前までの私でしたら、きつとすぐ怒っていたと思うのです。どうして約束を破ってしまうのですか、とかそんなことを平気で妹紅さんに言っていたと思います。いざ眠って起きてみると、怒りなんてありません。むしろ、穏やかです。こんな時間に目覚めてしまったら、また夜に寝られなくなってしまうとかそういう不安も恐怖に襲われるのですが、そんなこともありません」

怒られないと分かった妹紅は心の内に溜まっていた不安を吐き出すように一息ついた後、当惑を続ける阿求に柔らかく笑いかける。

「良かったじゃない、寝られて」

「良かったと思うのですが、……不思議ではありませんか？」

「そう?」

「そうですよ」

「他の人でも試す？」

「それはちよつと……」

妹紅の提案は、阿求の悩みを解決する方法としては良いように思われたが、妹紅以外の者に頼んだところで全然意味がないことは、もう考えに至ったことである。妹紅に伝えたところで理解を得られるのは難しいだろうと思ひ、素直に抵抗を示した。他の者で試すよりも、妹紅とのことを明らかにした方が話は早いだろう。

阿求が妹紅に一定の信頼を寄せているから、怒りも不安も恐怖も生じなかったのかもしれない。そう思うのが自然なのかもしれない。一体どうして深い眠りに導かれたのだろう。信頼と眠りの関係性が、阿求には分からなかった。

阿求は心のどこかで、妹紅に対して信頼や信用や安心感というのを持つてはいけな
いと思つて接するように心掛けている。他の者達と接するように、接しなければなら
ないと思つている。

阿求が短命で転生を繰り返す身であり、妹紅が不老不死であるがため、より一層気を付け、自らを律する必要がある。別離の苦しみを味わうことは阿求も度々ある。御阿礼の子として記録や記憶と現実が一致せず、面影だけが残っている現実を目の当たりにすると胸が詰まる。自分だけが遠い未来に取り残されてしまったような感覚に陥る。普通の人間とは違った生き方を歩むことは、自分自身で理解していたはずなのにも拘らず、いざ現実を前にすると胸が詰まる。

妹紅が味わう別離の苦しみは阿求の味わうものよりももつと苦しいかもしれない。頭でどれほど理解しても、味わう別離の苦しみはいつでも同じだろう。

阿求は自らを律して、妹紅を他の人間達と同じように扱いたい。その方が互いにとって良いのではないだろうか。阿求も妹紅も、それほど親しくない者との別離ならば、大きな衝撃や苦しみに晒されることはない。このままの関係でいた方が互いの今後を思うと、良いように思われた。

夕餉の準備を終えた女中が呼びに来て、阿求は腰を上げた。妹紅も腰を上げた。

「また明日の朝に来るわ」

阿求と妹紅と女中の三人は揃って書斎を出て、廊下を歩いた。阿求と妹紅は不思議と黙っていたが、女中が阿求に問う。

「今夜は眠れそうですか？」

「さあ？ 分かりません。そんな先のことは」

「私としては眠っていたけると嬉しいのですが……。妹紅さんもそう思われませんか？」

「明日の朝に様子を見にくるから心配しなくても大丈夫よ」

女中は阿求の胸の内を知らずに、当然ともいえる心配事を口にする。

「眠ってなかったらどうされますか？」

「どうもしないわよ。そんな一日二日で何とかなるようなことではないでしょう？」

何かを確かめるように問われ、阿求が静かに頷くと玄関に着いた。妹紅と別れ、居間に歩むまでの道中で食後の湯浴みを女中に命じ、阿求は一人で少し冷たい夕餉を食した。

湯を浴びて寝汗を流した後、寝間着に着替えても阿求の姿は書斎にあった。机の向こうには布団が敷かれている。先ほどまで眠っていたのだが、そう見えないほど寝具が整えられているのは女中のお陰だろう。

湯上がりで火照る頬にまだ湯の温もりが残る手を添え、訪れる気配のない眠気に頭を悩ませる。分かっていたはずなのだが、現実と対面するとやはり困ってしまう。今夜はもう阿求一人しか書斎に居ないため、阿求一人でどうにかするしかない。考えたところで、阿求一人ではもうどうにもできない段階まで事は進んでおり、阿求の採れる選択は一つしかない。

少し編纂に取り組んだが、それ以上は進める気にはなれず筆を置いた。目前に広がる夜闇のことを思うとどうも気が進まない。昨日までは全然そんな気はしなかったのに。安らかな眠りを覚え、また夜が恐ろしくなったとでもいうのだろうか。

今夜の阿求の胸に巢食う恐怖や不安という類は、これまでとは少し違ったものだった。これまでののは、朝を迎えても姿を消すものではなかったが、今度のは翌朝を迎えれば阿

求の胸からいなくなることを、阿求自身が分かっていた。明朝になれば妹紅が訪れてくれることが、阿求の心に確かな光をもたらしてくれたのだ。

このままではいけないという焦りもある。阿求の一生は既に折り返し地点を迎えており、稗田阿求という少女が藤原妹紅という少女の側を離れる時が近付いている。このまま妹紅に頼ってしまうのはいけない。阿求の眠りへの恐怖は一日や二日で落ち着くようなことではないことを、阿求は勿論のこと、妹紅も理解を示してくれている。その厚意に甘えてもいいのではないだろうか。

阿求はどうして妹紅の厚意を素直に受け止められないのでいるのだろうか。阿求の眠りへの恐怖が落ち着くまで、妹紅の厚意に甘えることがどうしていけないのだろうか。阿求が人間らしい生活を取り戻すことができれば、阿求と妹紅の関係は今まで通りと変わらない関係に戻る。そうなるはずなのだ。

人間らしい生活を取り戻した後でも阿求がまだ不安だと声をかければ、妹紅が側で見守ってくれる未来を、あまりに容易く想像できた。阿求にとって、妹紅は優し過ぎた。そ

の優しさに甘え続けければ、ずっと頼ってしまふ。偽りの不安を口にしてしまふ未来すら見える。

阿求にとって、妹紅の優しさは以上ないほどに恋しく、安らかなものを与えてくれる。何かと理由を用意して妹紅の優しさを遠ざけたいと考えてしまふのは、阿求は妹紅に対して何一つ返せるものがないからだ。

真夜中の思考は阿求の心を追い込む。早く朝になつてほしいと切に願う。眠れば早く朝を迎えられるのに、眠れそうにない。朝になれば、妹紅が訪れる。待ち望んでいるはずなのに、今の心持ちで彼女に会うのは気まずい。気持ちの整理ができる時間は沢山あるけれども、考えれば考えるほど深みにはまり焦りを生む。

そうして、朝になつた。使わなかつた寝具は書斎の端に畳み、座布団を用意し、妹紅を待つ。

阿求は強い眠気や頭の重さを覚えることはなかつたが、胸の内に真夜中の時と何一つ変わらない気まずさが広がっていた。

女中に案内され、書齋へと足を運んだ妹紅の顔を見るのすら申しわけなくなり、さつと顔を伏せた。顔を伏せると、障子の方から微かな土の香りが漂ってきた。

妹紅はそんな阿求の姿を見て、朗らかに笑ってみせた。

「寝られなかったのは、貴女が悪いわけではないから、そう気に病む必要はないわよ」
「……ですが」

「今夜も眠るでしょうし、明日も眠るでしょう。明後日も。眠りは一生付きまとうものなのだから、気長に考えればいいのよ」

励まされるような言葉に、阿求は自身の顔が曇ったのを悟った。阿求は顔を上げて、訊く。

「それで良いんでしょうか？」

阿求の問いに妹紅は穏やかに答えてくれる。

「いいのよ、それで」

妹紅は阿求の問いの深いところまでは分かっているようだった。妹紅はそれで良い

のか、と訊きたかった。阿求に付き合わせるようなことをしていいのだろうか、と確認したかった。妹紅がどう考えているのか分からず、訊けなかった。

阿求は妹紅にどのように答えてほしかったのだろうか。それで良いと肯定されても、それではいけないと否定されても、阿求が困るだけだった。優しい妹紅ならば、それでもいいと答えてくれると思っていた。妹紅の優しさを自分のために利用している阿求自身を見出して、胸に痛みが走った。

女中が二人分の紅茶を運んできて、朝餉のことを阿求と妹紅に問う。共に、少しならばと返事をして、書齋に運んでもらうことにした。

「昨日よりは良い顔色よ？」

「昨日よりは寝られていますから」

「それで、今日はどうするつもりなのかしら？」

「……今日、ですか？」

妹紅に尋ねられ、阿求は答えに悩んだ。全然考えてなかった。改めて尋ねられると、ど

う答えればいいのか分からない。迷った阿求の口から零れたのは、紛れもない正直な気持だった。

「起きておこうと思います。少し編纂をして、ゆつくり過ごしたいです。……妹紅さんは？」

妹紅は自身が尋ね返されると思っていないか微かに首を傾げ、

「私？」

と呟いた。顎に手を添え考える素振りを見せる。妹紅が竹林の近くに庵を結んで生活したり自警団や案内人などをしていることは知っているが、その他のことはよく知らない。妹紅との付き合いが長いはずなのだが、阿求は彼女について知らないことの方が多かった。

「別に貴女のように何か予定があるわけではないのよねえ……」

「暇なのですか？」

遠慮なく訊くと、妹紅は困ったように笑う。

「別にそういうわけじゃないのよ？ 竹林の世話とか田畑の手伝いとか火の確認とかあるし、忙しい時は忙しいのよ。ただ、時期が時期でしょう……？」

自らを律していた阿求の心が揺らぐ。あれほど一人で考えていた真夜中の時間が、途端に可笑しなもののように感じた。

阿求は口元に自然な微笑を浮かべ、妹紅に訊く。

「でしたら、……忙しくなるまで、私の所に来てくれませんか？」

妹紅は阿求の問い掛けの意味が分からないように素直な答えを口にする。

「……来てるじゃない？」

阿求の頬は急に熱を帯びた。音の詰まった極短い悲鳴を幾つか上げた後、顔を真つ赤にして希望を口にする。

「もう少し、沢山……。一人でいるより、妹紅さんと一緒にいたいのです」

恥ずかしさと強い罪の意識が同時に働き、それから先の思いを口にすることはできなかった。

妹紅が何か言おうとした時、女中が朝餉を運んできた。紅茶と合うような洋食だった。焼いたパンと少しのサラダ。

阿求はこの屋敷で一人で生活しているわけではない。身の回りのことは女中が世話をしてくれる。女中は阿求が御阿礼の子としての責務を果たすために生活の場を整えてくれるだけに過ぎない。

二人で一軒の屋敷の元で生活を共にしているようで、一人と一人の生活を続けているようだった。重なり合った時だけ、同じ生活を送っている。妹紅がいても変わらないのかも知れないが、今よりは一人になることは少ないだろう。真夜中の時のように、色々なことを考えないで済むだろう。

女中が書斎を去った後、妹紅は紅茶を啜り、感慨深く、阿求の言葉を繰り返した。「一緒に……。貴女からそんな言葉が聞けるなんて意外ね」

阿求はサラダを食べる手を止め、妹紅を見た。

「意外、ですか」

「誰とも一緒にいないように思ったから」

「妹紅さんが言いますか？」

洋食の豊かな香りに満たされた書斎で、阿求は柔らかく睨むような視線を妹紅に送る。焼けたパンを齧る妹紅は慌てて弁明する。

「私のそれとは違うのよ。人と接するのを拒む感じというより、人に優劣をつけない……人を平等に見てるとでも言おうかしら？ 観測者というか、手が届かない星を見てるようなのよ、貴女は」

「その方が良くありませんか？」

妹紅の手が止まり、阿求の言葉の真意を確かめる。阿求は紅茶を飲み終えると正直に答える。

「どういうことかしら？」

「私は三〇歳まで生きられません。もう人生の折り返し地点に来ています。ですから、多くを求めない方が良くと思うのです」

妹紅の顔が少し翳った。

「それでも、私と一緒に？」

「……いけませんか？」

「駄目、と答えてほしいのかしら？」

「違います！」

阿求は驚くほど烈しい調子で即座に否定した。妹紅は驚き身を固くする。

阿求も妹紅が驚いた後に自身でも驚き、僅かな間だけ身体を硬直させた。先ほどとは違う熱が身体中を一気に駆け巡り、頬や顔や耳までもを火照らせる。

阿求の否定は妹紅の問い掛けに答える要素を孕んでいたが、昨日の夜に悩んでいた自身と妹紅との関係について明らかにした。阿求が自らを律し妹紅との距離を一定に保とうとするのは、心苦しいことであるが二人のことを思えばそれで良かったかもしれない。が、妹紅から拒まれるのは耐えられなかった。そう言わざるを得ない彼女のことを分かっ

ていてなお、耐えられなかった。

「妹紅さんと一緒にいたいです。長くは一緒にいられません。私だけが先に一生を終えます。私も妹紅さんも苦しくなるだけなのは、分かります。私は分かっているのに、一緒にいたいのです……。それでも、それでも……」

阿求の言葉は少しずつ震え、最後は涙と共に流れた。あれほど側に居てほしいと願った妹紅の姿は形を失い、阿求の視界から零れ落ちた。妹紅に見せなくなかったが、阿求の意思と反して止めどなく流れ落ちてくる。涙で濡れる顔を隠すように両手で顔を覆う。震える手の隙間から涙が零れ、頬を濡らす。

妹紅は阿求の頬に指を添え、涙を優しく拭う。指先は心なしか震えているように感じた。妹紅の声は優しさに満ちていた。

「ねえ、阿求、こう考えましょうよ。苦しくなると分かっている一緒にいるよりも、楽しいことや嬉しいことを分け合うために一緒にいる。その方が私も貴女も良いと思うわ」
「でも私は何もできません。何も持っていないです。妹紅さんのように優しくできません……。自分勝手に我が儘です」

差し伸べられた優しさを振り払うように否定すると、阿求の肩が大きく震えた。心の奥底から再び涙が込み上げてくる。堰を切ったかのように流れ落ちる。阿求が自身の指で払っても払っても、留まることをしらない。妹紅の姿が見えたり、見えなかつたりする。阿求と妹紅の指先が触れ合ったが共に涙で濡れ、どちらがどちらの指か分からなかつた。妹紅の指が阿求の頬を離れ、慈しむように笑う。阿求はすぐに否定の言葉を並べる。

「阿求は十分優しいわよ。気付いていないだけで」

「そんなことはありません……」

「私と一緒にいたい。でも私が一人になることを分かっているから、我慢した。それは普通の人ではできないことなのよ。阿求が阿求なりに別れの苦しみを知っているお陰よ。私はその思いだけで十分よ」

「……私は、もつと他のことを」

妹紅のお陰で阿求の不眠や不安は和らいでいる。阿求はどれほどのものを妹紅に与えられているのだろうか。妹紅はその思いだけで十分だと言ってくれるが、阿求は全くその

思いというものが分からなかった。本当に、妹紅のことを思うのならば、もつとずっと、自らの胸の内に秘めておかなければならない思いだったのではないだろうか。妹紅に伝わらないほどに懸命に隠しておかなければならなかったのではないだろうか。

阿求はまだまだ幼い子供だった。阿求が妹紅と同じくらいに歳を重ねることができれば、自分の気持ちを幾重にも包み、曝け出すことはしないのだろうか。

阿求の胸に邪な、ある種当然ともいえる疑問が過ぎつた。涙が不意に止まり、疑問が育まれる。

阿求は妹紅と一緒にいたいと思っている。長く一緒にいられないと分かっている、互いに苦しむと分かっている、共に過ごしたいと思っている。

妹紅はどう思っているのだろうか。妹紅は阿求と一緒にいたいと思っているのだろうか。阿求が妹紅に対して懐いているような思いを、妹紅は阿求に対して懐いているのだろうか。訊かない方が良いのかもしれない。明らかにしないで過ごした方が良いだろう。優しい妹紅はどう答えてくれるのだろうか。

阿求だけが、一方的に妹紅を思っているだけの方が、妹紅の返答次第では幸福だろう。一度生まれた疑念は、阿求の背中を押そうと企てて、心を逸らせる。

阿求は紅茶を一口飲み、感情を押し殺した冷たい声で問う。口の端から漏れ出た息は、今までよりも遥かに熱かった。

「妹紅さんは、どう思っているのですか？」

朝餉を食べ終えた妹紅は残りの紅茶を飲む手を止め、茶碗を置いた。

書斎は不気味な沈黙に満たされた。問いの真意を確認するように尋ね返すと思っていたのだが、妹紅は何も言わなかった。静かに阿求を見て、考えている。妹紅が何か言ってくれれば、阿求は更に一步踏み込んだ質問を投げかけられるのだが、妹紅はまだ答えてくれない。

このまま答えてくれなかったとすれば、どうすればいいのだろうか。歯が震え、微かに音を立てる。

妹紅の気持ちを知りたいと思うことは、いけないことなのではないだろうか。妹紅がど

う答えても、その先に幸福は花開いていないように見える。否定されれば阿求は傷付き、苦しむ。肯定されてもその先にあるのは生き残ってしまう妹紅の苦しみであり、先立つ阿求の苦しみがある。苦しいことよりも楽しいことをと妹紅は教えてくれたが、阿求は全然楽しい思いを見出せない。もしかすれば、妹紅のことを全然知らないから、二人が共に歩むであろう未来が、どのような色彩を帯びているのか分からないのかもしれない。

誰かと共にいたいと願うことは、どうしてこれほどまでに苦しみを生み出すのだろうか。妹紅以外の誰かと一緒にいたいと願えば、この苦しみは和らいでくれるのだろうか。阿求にはもう、妹紅以外の誰かと共にいる未来は思い描けなかった。

沸き立った疑問は急速に萎み、阿求の胸には後悔ばかりが広がる。あれほどしたくなかった優しい妹紅を自分自身のために利用していることを思い出した。

妹紅は依然として沈黙を守っており、阿求は掻き乱された心を落ち着かせるように、自らに言い聞かせるように言った。

「……忘れてください、今の言葉は」

阿求は両手で茶碗を包むように持って、水面に映る焦燥した顔にこういう言葉も吐いた。「答えてくれなくて良かったです」

妹紅はまだ何も言わず、紅茶を飲む。茶碗を持つ指が震えていて、どういう質問をしたのか阿求はようやく分かった。

「きつと、不安なのだと思います。眠れないことも一生を終える時が刻一刻と近付いていることも、他にも……色々なことで不安です」

気持ちが悪くと、また涙が込み上がってくる。ぐつと堪える。涙は容易に頬へと伝い落ちそうだったが、阿求は懸命に堪えた。零れ落ちてしまえば、言葉は涙に飲み込まれてしまいそうだった。涙の貯まった瞳で妹紅を見て、堪えきれない不安を吐き出した。

「妹紅さんと一緒にいたいと思うことが、どうしてこれほどまでに苦しいことなのでしょうか……。どうしてこれほどまでに、苦しみを覚えなれないといけないのでしょうか。もっと楽しいことで満ちていると思いたいのには、私はどうして不安や苦しみを覚えるのでしょうか……」

妹紅は阿求から逃げるように顔を伏せた。僅かな後に顔を上げた。鮮やかな瞳が、今までで見たことがないほどに震えている。阿求が声をかければ、妹紅の瞳から瞬く間に涙が溢れ、零れ落ちるだろう。阿求は妹紅にそんな顔をさせるために、不安を口にしたわけではなかった。

阿求は息を吞んで、妹紅の言葉を待った。深い悲しみに満ちた声で、妹紅は言う。

「それはきつと、私も不安や苦しみを抱えているせいかもしれないわね。私達は私達のことを思うと会わない方がずつと互いのために幸せだと思うわ。でも、貴女達の一生が、そうはさせない。同じように違う、違うように同じなところもある貴女達が……」

妹紅は続けて、述懐する。

「面影を感じさせる貴女達と出会い、親しみを覚えてしまう。多くの人間達と同じように距離を置いて、拒めないのよ。過去の貴女達と同じ一生を辿ることは体験しているはずなのに。拒めないのよ……。拒みたくないと思っっているのよ……」

妹紅の姿が急に遠くなった。手を伸ばせば触れられる近さにいるはずなのに。

遠い過去に溺れようとしている妹紅に、阿求はかける言葉がなかった。阿求の味わう孤独や苦しみとは全然違うものに、阿求はどういう言葉をかければいいのか。妹紅の姿は妹紅でありながら、阿求が知らない妹紅だった。初めて見る妹紅の姿だった。

「その度に思うのよ。私はまだ、人間であろうとしている、つて。もうとつくの昔に人間ではないと分かっているはずなのに……」

吐き捨てるように自嘲した妹紅に、阿求の身体は反射的に動いた。立ち上がり、妹紅の胸に飛び込んだ。妹紅は突然のことに驚き、動揺し、阿求の行為を受け入れるしかない様子だった。

倒れそうになる妹紅の身体を、どこにもいかせないように抱き留める。妹紅の背中に手を回し、ぐつと引き寄せる。妹紅の身体は、温かった。腰まで伸びる銀色の髪に触れる。柔らかい髪だった。妹紅の白い額に、阿求の額をそつと当てると熱が伝わってくる。微かな息の音すら聞こえてくる。思慮深い瞳は今では当惑一色に満ち満ちて、奥には優しく笑う阿求の顔が見て取れる。

「妹紅さんは、ちゃんと人間ですよ。大丈夫です。こんなに温かいんですから。……大丈夫です。一人になろうとしないでください。一人になってしまつてはいけません。嫌です」

妹紅は阿求の胸元で頭を垂れた。妹紅の顔は妹紅自身の長い髪や阿求の着物の袖や袂に包まれ、見えなくなつた。少しの沈黙が生まれた。阿求は掌から妹紅の頭が震えていることが感じ取れた。胸から伝わってくる慟哭にも気付けた。阿求は何も言わなかつた。誰にも見られないように妹紅を包み込み、阿求の温もりを分け与えるように妹紅の側から離れなかつた。

妹紅が阿求にだけ聞こえるかもしれない小さな声で言つた。

「いつも私を一人にさせてくれないわね」

「観測して記録して伝える。私の、私達の唯一の役目ですから。誰も、一人にはさせませんよ」

妹紅は力なく笑つた。

「……馬鹿ね。たまには抜け落ちてても構わないのよ」

「嫌ですよ。一緒にいたいのですから」

阿求は声を立てて笑った後、晴々とした笑顔を妹紅に向けた。涙に濡れた妹紅の頬は所々が輝いていた。赤い瞳に先程のような不安はなく穏やかな色を帯びていたが、その色のどこかには恥や照れも見え隠れしていた。

阿求は見たことのない妹紅の表情に驚きながらも、平静に訊く。

「私は、妹紅さんと一緒にいたいのです。妹紅さんは、私と一緒にいてくれますか？」

その言葉に先程のような邪なものはなく、どこまでも純粹で真心に満ちていた。阿求の胸には妹紅がどう答えるのか確信があつた。それでも妹紅の声で、彼女の言葉で聞きなかつた。

「……私も一緒にいたいわ。時が許す限りは、一緒に」

後書き

この度は、「恋煩い」をお買い求めいただき誠にありがとうございます。出藍文庫として個人誌を頒布したのは、随分と久し振りではないでしょうか。恐らく、二年振りになるのでしょうか。先の紅樓夢で多くの方と再会しましたが、こうして自分のサークルで新刊を頒布し、参加者の方々と交流するのはやはり楽しくもあり嬉しくもあり、その場でしか得られないものがあると感じます。

求代目の紅茶会は本来でありましたら、九月に開催予定でありましたが、昨今の情勢により年明けに延期になりました。九月の段階ではこの短編は全く全然書いておらず、自分の心身の不健康もあり非常に苦しい生活が続けておりました。それがこうして新刊を書き上げることができ、心身の健康状態も安定しており、皆様とお会いでき、幸甚の限りです。ありがとうございます。

久し振りに同人誌即売会にサークル参加することになり、何をしなければならないのか忘れていたことが多く、本文を書き上げる以外のことは幾人の知り合いの助けを得て、何とかなりました。組版を承ってくれた㊦氏に謝辞を申し上げます。

今作はサークル参加申し込みみやサクカを作成した段階では、短編を二つ収録した同人誌として頒布する予定でした。稗田阿求視点で一万字程度の短編。藤原妹紅視点で一万程度の短編。合わせて、文庫一〇〇頁程度の短編を予定しておりました。

サクカに用いた「夜の戯れ」は、藤原妹紅視点で描かれるはずだった物語のタイトルとなっております。それがどうして一つの短編だけになったのかと言いますと、書き上げた段階で、物語としてまとまっており、妹紅視点で描く必要はないのではないかと考えに思い至ったためでございます。プロット段階では、こういうふうには展開させるつもりは全くなかったのです……。書き進めていく間に変わっていく、落ち着くべきところに落ち着きました。

次のサークル参加や即売会参加がいつになるのかは、現時点では何も考えておりません。自分の生活を見直しながら、少しずつ何か小説を書き進めていこうという気はありますので、どこかでまた再びお会いできればこの上ない幸せでございます。

恋煩い

初 版 2022年(令和3年)1月10日

原 作 東方Project(上海アリス幻楽団)

印 刷 ちょ古っ都製本工房

発 行 者 近藤貴弥(出藍文庫)

連 絡 先 stkk7.920521@gmail.com

組 版 RedForestDesigning

ロゴデザイン 工 藤 雅 弘

本書の無断転載・販売・無断販売等を禁じます。